

位に腫脹が出現し当科入院。入院時、大転子 lag screw 挿入部に感染を伴う潰瘍が存在し、単純 X 線にて nail 周囲に clear zone を認めた。局麻下に感染した皮膚軟部組織を切除し抗生剤投与による治療を行ったが、改善せず排膿が続いたため、2010 年 2 月抜釘とともに感染した皮膚軟部組織の切除を行い大腿筋膜張筋皮弁による再建術を行った。手術時、皮下軟部及び骨髄内には多量の膿が存在していた。手術後感染は消失し、術後 1 年以上経過した現在も経過良好で独歩可能である。一般に筋(筋膜)皮弁は皮膚軟部組織欠損を再建する有効な手段として広く認知されているが、骨髄炎を伴う感染性難治潰瘍に対しても感染を鎮静化する有効な治療法である

#### 5. 大腿骨顆部冠状骨折 (Hoffa fracture)

生越 敦子, 萩原 敬一, 大澤 貴志  
小泉 裕之, 今村 仁, 木村 雅史

(善衆会病院 整形外科)

大腿骨顆部冠状骨折は coronal fracture と呼ばれ、比較的稀な骨折である。初回単純 X 線で骨折線が不明瞭なことが多く、骨折線を見逃されやすい。また、転位が少なくとも、解剖学的に骨折部に強い剪断力が加わることで、完全関節内骨折ことなどから、骨癒合不全、偽関節となりやすい。このため、本骨折においては、解剖学的整復と、強固な内固定が推奨される。

当院で経験した、Hoffa fracture について報告する。

#### 6. 小児の大腿骨骨幹部骨折の治療 一当院での治療経験と年齢による比較一

永井 彩子, 浅見 和義

(前橋赤十字病院 整形外科)

小児の大腿骨骨幹部骨折は、骨癒合が早く自家矯正力も高い為、保存療法が主に選択される。しかし回旋変形や過成長などの問題もあり、年齢によっては自家矯正も起こりにくい。2006 年から 2011 年まで当院で入院加療を行った小児の大腿骨骨幹部骨折 18 例 18 肢を対象とし、年齢とその治療法について考察した。

手術療法と保存療法を比較した場合、脚長差・内反変形・前方凸変化肢位変形において、解剖学的整復位をとれる手術療法の方が短期的には変形治癒が少なかった。乳児から年少児には保存療法を行い、学童期(特に 10 歳以上)では髓内固定手術を選択することが多かった。その中間年齢層では個々の症例に応じて選択していた。変形治癒の程度はいずれも許容範囲内であった。反省点はフォローアップ期間が短く、変形の程度を一貫性を持って比較検討できなかったことである。

## <主題 II>

### 下肢骨折患者における深部静脈血栓

座長：森本 和典

(利根健康生活協同組合 利根中央病院)

#### 7. 下肢骨折患者における深部静脈血栓症の合併への県内各施設の対応について

森本 和典 (利根中央病院 整形外科)

県内 24 施設の対応をアンケート形式で調査した。

D ダイマーの測定を無症候でも行う症例について、術前、下肢人工関節手術予定患者に行う施設が 3、下肢骨折手術予定患者におこなうのが 1、いずれにも行うのが 11、下肢手術全例に行うのが 2、測定しない施設が 7。術後は人工関節手術患者に行うのが 3、人工関節、骨折手術患いずれにも行うのが 12、全例行うのが 2、測定しない施設が 5、骨折症例はハイリスク患者にのみ検査する施設が 2 あった。

D ダイマー高値とするのは 5 以上が 3 施設、10 以上が 13、15 以上が 1、20 以上が 6 であった。

D ダイマー高値となった症例に対し、緊急で超音波検査可能な施設が 17、数日待機する施設が 3、不可能な施設が 4 あった。造影 CT 検査は緊急検査可能な施設が 21、数日待機する施設が 3 あった。

深部静脈血栓症の発症症例は 29 あり、大腿骨頸部内側骨折が 4、転子部骨折 14、骨幹部骨折 1、顆上骨折 1、脛骨高原骨折 3、骨幹部骨折 2、膝蓋骨骨折 2、骨盤骨折 2

患者の受傷時平均年齢は 75.7 歳、DVT と診断されたのは術前平均 7.2 日、術後平均 9 日、手術中発症が 1、手術待機期間は平均 11.4 日、なんらかの合併症を持つ症例が 17 例あった。

#### 8. 下肢外傷に伴い肺血栓塞栓症にて死亡した 2 症例の検討

石綿 翔, 荒 毅, 柳澤 信明

大澤 敏久, 新井 厚

(高崎総合医療センター 整形外科)

今回我々は下肢外傷に伴い肺血栓塞栓症となった死亡例を 2 例経験した。若干の文献的考察を加えここに報告する。

1 つ目の症例は 74 歳女性、2010/5/6 に電動芝刈り機で受傷し当院に救急搬送となった。左膝裂創あり膝蓋腱断裂があり局所麻酔下に縫合を行った。入院時の D-dimer は 1.66 であった。5/9 朝、物音がした後にベッドサイドで倒れているところを発見される。意識清明で胸痛を訴えていたが、その後心肺停止となり、CPR 施行するも蘇生できず死亡確認となった。発症時の D-dimer は